

「古美術からみる東大寺の美」展にあたって

キュレーション 白洲 信哉

本展は、僕が考える「日本美」のトップスターである。

展示室最初に並ぶ古美術界の通称「日の丸盆」こと「二月堂練行衆盤」は、お盆のチャンピオンであり、「根来」の魅力をいかに伝えている。

「根来」は、中世の神社やお寺で、日常的に使用されてきた朱漆の器で、積年の使用具合により、上塗りの朱色がはげ、下塗りである黒色の塗り肌が出てくる事により、自然に出来上がった赤と黒の抽象文様が魅力である。そこには長年の使用に耐えられる強靱な木地と、使い易さという、耐久性と機能性が備わっている。この「用の美」こそ「日本美」の本質であり、歴史が重層的につながっているわが国の伝統が、創り上げたものだと思う。

早春、奈良の伝統行事として知られる「お水取り」。正しくは「修二会」といい、東大寺二月堂において十一面観音に悔過する行法である。752年(天平勝宝4)に、実忠和尚により始められ、以後1260余年一度の中断も無く続く奇跡的な行である。3月1~14日、参籠の練行衆が、毎日食堂にて、食事のときに使用した丸盆が、この日の丸盆なのである。本展で展示する9枚すべては、1298年(永仁6)の銘がある。重要な事は、毎年一定期間等しく使用した結果、一枚一枚違った趣きを醸し出しているということだ。器の擦れ具合や、練行衆の性格等、不確定な要素と、何百年の時間が、オンリーワンの「美」を形成したのである。

櫛の一枚板を轆轤挽きで成形した26枚は、幕末近くまで使用され、明治以降、同形復元新調され引退したが、盤表面の鮮やかな朱色が、日輪を連想させることから、数寄者が垂涎のものとして珍重したのである。この使用感ののちの、雅味を感じて頂けたらと思う。

もう一つは、これまた通称「二月堂焼経」こと「紺紙銀字華嚴経」である。「焼経」というのは読んで字の如く焼けたお経のことで、僕ら古美術好きには焼けたお経イコール東大寺二月堂のそれを指すのである。1667年(寛文7)同じく修二会行法中に火が堂中にまわり、華嚴経六十巻をおさめた経櫃が不幸にして燃えてしまう。だが、焼け跡からみつかった経巻は、焼け跡が一卷一卷違った趣きで、一紙一紙が一幅の抽象絵画のような、これまたオンリーワンのお経として珍重されるようになる。確かに焼けてはしまったが、器に金継をするように、また破片をあつめて繕い、呼継といって、新たな生を誕生させるが如く、本来なら滅びてしまったものに、新しい価値観を見出していくのが古美術である。

今回は巷の好事家が、名器を継ぐように一卷を切り、試行錯誤の上に表具を施し、現代の生活にも利用出来るよう掛軸に仕立てたものもあわせて展示した。ある意味の里帰りであり、個人個人の感性「見立ての美」というものを味わって頂けたらと思う。

最後に、一風変わっている展示品、金剛蔵王権現像に触れたいと思う。ここ本坊は、平安時代に理源大師聖宝によって開かれた東南院があったところである。聖宝は弘法大師の実弟、真雅僧正の弟子で、醍醐寺を開いた名僧であり、俗にいう修験者として大峯中興の祖にもなった。その後、東南院はいくたびかの再建焼失を繰り返して、明治には天皇の行在所になる。今でも上壇の間には玉座があるが、ある一定の時代、修験の道場をも備えていた東大寺の多様性を伝えたく、東南院ゆかりの金峯山の金剛蔵王権現をあえて展示することにした。本年、明治150年の節目に、権現信仰の面影を感じて貰いたいと僕は思っている。

二月堂練行衆盤(日の丸盆) 表銘: 十七 鎌倉時代 永仁六年 東大寺蔵
蔵王権現立像 平安時代 木造彩色 像高一〇六・九cm 個人蔵



□アクセス

JR 奈良駅・近鉄奈良駅より市内循環バス
「大仏殿春日大社前」徒歩5分
近鉄奈良駅より徒歩約20分

□駐車場

・奈良県営大仏殿前駐車場 (有料)
・奈良市水門町南院畑 82 (南大門南側)
TEL/0742-22-5025
※行楽シーズンはバス専用になることもあります
・GS パーク東大寺西大門駐車場 (有料・無人)
奈良市押上町 6-1